

【要旨】宮崎聖明 史料を“読む”ということ－宋元交替期の ある官僚の事績を手がかりに－

本講演では、南宋末期のある官僚に関する諸史料を手がかりに、史料に介在する「意図」を読み取ることの重要性を論じた。

対象としたのは、陳著（1214-1297）という官僚で、南宋末から元初を生きた官僚・文人である。彼には『本堂集』という文集があり、生前に書いた詩文・書簡に加え、地方官時代の公文書などが収録されており、決して高官とは言えない彼の官僚としての事績をうかがい知ることができる史料である。講演者はかつて、この『本堂集』を材料として、陳著が紹興府・じょう嵎県の知県を務めていた際に当地の「有力者」（宗室・外戚に連なる人々）の不法行為を取り締まろうとしていたこと、そのために中央政府の高官に助力を求める書簡を出していたこと、さらには当時の専権宰相である賈似道にも助力を求めていたことを明らかにした。そして、嵎県における事件の構図は、賈似道と宗室・外戚の対抗関係を反映したものであること、加えて陳著には賈似道にいわば「取り入る」ことで昇進を果たそうという意図があったと思われることを指摘したのであった。

しかし、陳著に関する史料には、これとは逆に、彼を賈似道の専権に反対した人物とするものがある。本講演では、それらの史料と、『本堂集』の記事からうかがえる陳著の事績との関係を検討し、史料に介在する「意図」を考察することを目的とした。

清・陸心源『宋史翼』には陳著の列伝があり、陳著を反賈似道の人物とするが、これは明清時代の各種地方志における陳著に関する記事をもとにしており、さらにそれらの記事の淵源は元末明初の人、陳^{けい}けいが編纂した『通鑑統編』という編年体の歴史書にまでさかのぼることができる。『通鑑統編』には陳著が賈似道に逆らったことに加え、陳著の祖先が高官であったことが記載されているが、陳著が科挙に及第した際の同年録（科挙及第者の名簿）を見ると、父祖の名前のみが記載され、官位は書かれていない。他の史料にも陳著の父祖が高官であることを示す記述はなく、これらのことから、『通鑑統編』に書かれた父祖の官位はいずれも捏造であると考えるのが妥当である。また、陳著が賈似道に反発したという記述も、いずれも同時代の史料には見えないものであるばかりか、同時代史料に不自然な形で挿入された痕跡がうかがえる。

これらの捏造や記事の挿入を行った陳^{けい}は、陳著の孫にあたる人物である。父祖の官位を捏造したのは陳氏一族を「名門」とするための作為であるとして、祖父陳著が時の宰相と反目していたという創作は何を企図したものであったのだろうか。賈似道の専権時代は、南宋がモンゴルの攻勢にさらされている時期であった。最終的には賈似道自身が戦地に赴くも劣勢は挽回できず、国家を危機にさらした責任を取らされた賈似道は、宰相を罷免され、地方に流される途中に殺害される。そして翌年、南宋の首都臨安はモンゴルに無血開城される。中国の

伝統的な歴史観では、王朝の衰退・滅亡の責任を個人に帰すことが一般的であり、この点から賈似道はいわば「亡国の宰相」として後世において語られることになる。つまり、陳桎には、「祖父陳著は賈似道に迎合しなかった」というエピソードを創作し、先祖の名誉を「宣伝」しようという意図があったのである。

このような創作は、王朝交替の混乱期に限らず、また中国史に限らず広く「史料」というもの全般に起こりうることだと言ってよかろう。歴史学においては、史料を相互に参照したり、編纂者の立場・意図を考慮に入れて史料を読解したりすることで、史料の誤り・捏造などを洗い出す「史料批判」という作業が欠かせないのである。